

## 岩手医科大学歯学会第21回例会抄録

日時：昭和61年2月22日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階講義室

### 演題1. フッ素洗口の終止後う蝕予防効果

○稲葉 大輔, 田沢 光正, 飯島 洋一,  
宮沢 正人

岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座

フッ素洗口のう蝕予防効果は従来主として洗口期間内について明らかにされているが、洗口終了後の実態は十分に明らかにされているとは言い難い。今回演者らは小学校在学中にフッ素洗口を経験した集団の追跡調査をもとに、洗口終了後どのようなう蝕有病状況ならびにう蝕増加状況にあるかを検討した。

調査対象は花巻市西南中学校の昭和57, 58, 60年在籍生全員で、同校生徒は太田小学校ならびに笹間第一、笹間第二小学校の3小学校出身者により構成される。この内、太田小学校出身者は小学校在学中にフッ素洗口を3.5～6年間経験し、卒業時にこれを終了した後中学校に進学しており、洗口群とした。その他の小学校出身者は小学校在学中にフッ素洗口を経験しておらず対照群とした。太田小学校のフッ素洗口は500ppmFを用い昭和52年秋より全校児童を対象に開始され、原則として週5回実施されている。なお西南中学校ではフッ素洗口を実施していない。

口腔診査は視診型により、複数の診査者が出身小学校をブラインドした状態で昭和57, 58, 60年のそれぞれ春季に実施した。

洗口群と対照群の間でDMFT Indexならびに歯種別DMFT歯率を比較した結果、洗口群の各指標は歯種別DMF歯率の一部を除いて洗口終了直後、1年後を2年後ともに対照群に比較して低い値を認め、低いう蝕有病状況が調べた限り終了2年後まで持続する傾向が観察された。

また、連続受診群を対象としてDMFT Index・歯種別DMF歯率の年次推移ならびに歯種別の発病歯率を洗口群と対照群の間で比較してう蝕増加状況を検討した結果、本研究に関する限り、洗口群におけるう蝕

増加は対照群と同程度である傾向が観察された。

### 演題2. 宮守村における歯科保健活動とその実態

○深沢 範子

宮守村歯科診療所

宮守村は昭和52年以来、村政の重要政策に村民の健康保持と増進ということをかかげ、実践してきた。しかし、長年、無歯科医村だったこともあって、口腔衛生面では、かなり立ち遅れていた。しかし、7年程前から歯科予防活動にも力を入れ、一応の成果をみたので、中間報告として、報告する。

現在の乳幼児検診等は、各戸に配布された保健ごよみを見て、自主的に受けるシステムになっており、次のようである。

(妊婦検診及び母親教室)

1歳・2歳児検診とフッ素塗布・予防教室、1歳半・2歳半・3歳半検診と個別指導又、幼稚園・保育所、小・中学校は毎年春または春秋2回の検診を行っている。昭和57年度からは岩手医大小児歯科教室の援助も受けて、詳しいデーター分析も行ってきた。

昭和60年度の春の検診結果をみると、D者率は小学校の30～40%、中学校では60～70%である。各う蝕分布は、殆んどがC<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>であり、C<sub>3</sub>～C<sub>4</sub>は0に近い。7年前、殆んどの第一大臼歯がC<sub>3</sub>～C<sub>4</sub>であったのを思うと口腔内の状態はかなり改善してきたものと思われる。一人平均のう蝕数も小学校では0.68～0.98本と少ないが中学校では2.26本と多い。DMFT指数は、小学校平均2.3で、まだ目標には遠いが、予防活動の恩恵を受けなかった現中学3年生の女子になると8.9という異常高値を示している。各幼、保育所、小学校では給食後ブラッシングを行っているのに、中学校ではそれが行われておらず、大部分の第二大臼歯をう蝕にしてしまうのも一因である。

昭和58年から始めた妊婦検診は約30%の受診率しか